大場幸夫が考えていた保育の原点

気になる現象への気づきを深める

「保育実践研修会」では、実践の発表と質疑を行い、それをひとつの手がかりにして、大宮市の各保育所にかかわるであろう問題について、それぞれが考え合っていくことを主な目的としていると考えています。この会での私の役割は、発表された実践や質疑への専門的な立場からの評価、指導、助言を行うことではなく、研究会の参加者の一員として、私自身が発表や質疑応答を聞きながら感じたことを、共に考え合う問題のひとつとして提起してみることにあると思います。

今回の発表と質疑を聞いて改めて確認できたことは、だれが見ても「こうだ」と言えるような客観的な資料によって子どもの状態を確認していくよりも以前に、担任の気持の中に生じた小さな気づきが、子どもの状態を捉える第一歩なのだということです。それは障害のあるなしにかかわらず、子どもとのかかわりの中で、何か気になるという形で浮かび上がってくるものです。例えば子どもの表情の乏しさやぎこちなさといったものは、子どもと一緒に生活している保育者がかかわりの中で感じ取れることであり、客観的には確かめにくい事柄でしょう。しかし、その子どもにとって最も身近な保育者（担任）のそうした小さな気づきは、実はその子が周囲の人とのかかわりあいをうまく形成していくかどうかと密接に関係していると考えられます。

子どもの数が減り、大人とのかかわりが増えていくことが可能になっているにもかかわらず、家庭、地域、園の中での一対一のかかわりがむしろきわめて希薄になっているようです。つまり、措置制度に決められているような「保育に欠ける」状態ではないが、「保育に欠けている」としか言いようのない子どもが多くなっているのではないでしょうか。生まれてからの環境の中で人とかかわる力、人に向かう力が培われていないと、物に向かう力も欠落しがちです。表情の乏しさ、笑顔のぎこちなさは、その子の人に向かう力の弱さの表われかもしれないのです。

担任の小さな気づきを認め、そのことを園生活の中で確かめてみること、それがその子どもへの保育者の豊かなかかわりを生み出していくことにもなるでしょう。子どもは園全体を使って、あちこちつまみぐいをしながら育っていきます。最優先させるべきは、職員集団がその子の状態を知り、それぞれがかかわりを通してその子が落ち着けるように心がけることです。保育者との生身の感情の交流が可能になること、そのことは生活習慣の自立とか、言葉の獲得よりも重要な保育の課題であると、私は考えます。

保育者が自分の見方、感じ方、かかわり方にこだわってみることは大切です。しかし、そのことは他の人の見方などを否定するものであってはならないでしょう。同じ子どもに対して、親の見方やかかわり方が自分と異なるとき、つい自分の見方を押し付けたくなります。しかし、子どもも相手によってつきあい方を変えます。子どもにもいろいろな面があることを認めて、お互いにそれぞれの考えを出し合ってみることが必要だと思います。この人の見方とあの人の見方を一緒にする必要はないのです。

また、乱暴だけれどやさしいとか、集中力はあるが散漫でもあるといった矛盾があることは子どもに限りません。特に子どもが発達していく過程には、矛盾層が見られることを津守先生が指摘しておられますが、そのどちらか一方だけが、その子どもの姿というわけではないのです。

子どもは大人の目を見ています。厳しくすればするほど、その大人がどうすれば喜ぶかを知り、その範囲で動いてみせます。しかし、自発性の育っている子どもは大人の好みには動きません。そうした子どもが出現することで、私たちはそれまでの自分の子どもに対する見方やかかわり方の枠組みを知ることになります。

今回の記録もそうですが、これを発表が終わったからとそのままにしてしまうのではなく、「何を」「どうするか」と方向づけて〝まとめる〟ことが大切だと思います。

食事から生活を見つめ直す

食事の問題は、栄養面だけではなく、人との関係ということで非常に大事な場面だと思います。食べさせた時の状況はどうだったか、という質問がありましたが、私は先生と子どもの間にどんなやりとりがあったのか、細かく振り返ってみたいという感じがあります。

私は食行動の問題と呼んでいますが、研究の領域によっては、食べたいという欲求が子どもの自発性を見るための良い例だとさえいわれています。偏食や異食、拒食、あるいは離乳の問題も含めて、食行動から人間関係をもう一度洗い直していくことが大事ではないでしょうか。

親や保育者は、急いでいる時や、時間の中に収めたいと思っている時は、食行動の大事さを考えていないことが多いと思うのです。「日常茶飯事」という言葉はとるに足りないという意味ですが、子どもの食事は日常茶飯事であってはならないはずなんですね。

乳幼児との生活で、保育者には、暮らしの流れをゆったりと味わえるような気持のゆとりが必要だと思います。そうした大人とつきあうことで子どもの世界がひらかれてくるんじゃないか。一日の生活のリズムがくずれてしまっている子どもは十分に気をつけてあげるべきだと思います。24時間の子どもの生活を頭に入れて、登園降園を節目として捉える必要があるのではないでしょうか。

ところが障害をもつ子どもの場合、生活のリズムを作ることを難しくさせている状況にあるわけです。まず園生活になじむことが大変なことです。障害をもつ子どもは、自分の障害を受け入れ、つきあっていかなければならない。そういう子どもたちが豊かな時間を過ごせるように、保育があるんですね。トレーニングすることではないんです。今、保育園にいるこの子に、長い人生の中でのこの時期に、一緒に暮らしている仲間として、何を送り出せるのか。そのことがこれからの一生の大きい意味をもつ。それが保育者の仕事になってくると思うわけです。

そして、迷っている親には、こう行こうという方向を示すことも、保育者の仕事になる。親が安心することによって、家庭での大人と子どもとの関係が落ち着いていく。そして、全体の関係が落ち着いて初めて、子どもは肩の力を抜き、自分のプレッシャーになっているものから自由になって、自分が何がしたいのかが見えてくる。

こうした、その子の状態全体を受け入れることから、子どもがぐっと変わってくるという事例はたくさんあると思います。なぜその子どもたちが変わりえたのかを探っていくと、共通点が見つかるんじゃないでしょうか。これは、障害の有無を越えてあると思います。

お話しいただいた3園の報告に対して、これからの課題として言えることは、言葉の問題にせよ、スムーズに人とかかわれるようにとか、基本的習慣の自立を目差すだとかいうことの根っこは何かというと、「いいかかわりを形成する」ということです。

これは青年期であっても出てくる問題です。ただっていくと、どういう幼児期だったのかが問われ、基本的な乳児期のやりとりにまでもどらなければならないわけです。本当のその子のテンポを見届けてつきあわなかった、ということなんですね。

事例で子どもたちが少しずつ好転していっている、その共通点は、「その子のペースを大事にして…」と書いてあります。これは障害のある子どもだけの問題ではなく、保育の原則だと思います。それができない現状があるとすれば、なぜできないのか、見つめ直す必要があると思います。

最後にひとつ、報告を読んでつくづく感じたのは、子どもの自己表現の大事さです。これまでは感情のコントロールということで押さえられていた、自己を思うままに表わすことを、いかに育てていくかが、今後の保育の大きな課題だと思います。